

英語・ポルトガル語における いわゆる繰り上げについて

坂 東 照 啓

1. はじめに

英語の構文に、埋め込み文(embedded sentence)の一部が、母型文(matrix sentence)の文法機能(主語・目的語)を帯びていると考えられるものが存在する。このような構文における現象は、下位の埋め込み文の一部が格上げされ、上位の母型文における文法機能を担っているという意味から、一般には、繰り上げ(Raising)という用語で呼ばれる。現在、繰り上げとして最もよく知られている型は、埋め込み文の主語から、母型文の主語への繰り上げ(Subject-to-Subject Raising, 以下、S→S Raising)である。さらに、文法関係を重視するような一部の研究者によって、埋め込み文の主語から、母型文の目的語への繰り上げ(Subject-to-Object Raising, 以下、S→O Raising)も認められている。

さて、こうした繰り上げは、ポルトガル語の構文においても観察されるであろうか。また、それが観察されるような場合、英語で繰り上げを伴う場合とは異なると考えられる点はないであろうか。本稿では、いわゆる繰り上げを伴う構文について、英語とポルトガル語の対照研究を行い、両言語で異なる文法的特徴の一面を探りたい。

2. 主語から主語への繰り上げを伴う構文

S→S Raising を伴っているとみなされる英語の構文は、次のようなものである。

- (1) Bill seems to me to be happy.
- (2) John is certain to come.
- (3) A policeman happened to pass by the hospital.
- (4) France is likely to refuse the proposal.

(1)－(4)における seem, is certain, happen, is likelyといった述語は、それぞれ、Bill, John, policeman, France そのものを描写しているものではない。(1)において、私に seem <見える>のは、「ビル」という個体ではなく、むしろ、「ビルがうれしい」という事柄(命題)である。また、(2)でも、確かなのは、「ジョン」ではなく、「ジョンが来るということ」である。同様に、(3)では、「警官が病院のそばを通るということ」が偶然起こった、(4)では、「フランスが提案を拒否すること」がありうる、と解

積される。実際、(1)–(4) と同じような意味は、形式主語 *it* を用いた構文によっても表せる。

(1') *It seems to me that Bill is happy.*

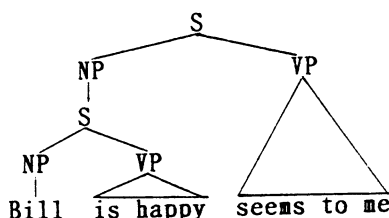
(2') *It is certain that John will come.*

(3') *It is happened that a policeman passed by the hospital.*

(4') *It is likely that France will refuse the proposal.*

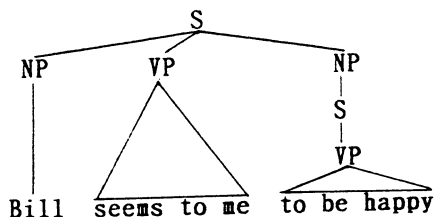
it は *that* 節を指すので、*seem* 等の主語は、意味的に *that* 節の内容なのである。従って、(1) の場合であれば、おおよそ (5) のような構造を基底に持つと考えられる。

(5)



(5) に対し、表層の (1) の構造は、次のように示される。

(6)



(6) は、(5) から、従属文の主語 (*Bill*) が主文の主語の位置に繰り上がり、残りの VP が非定形節として文末に現れた構造となっている⁽¹⁾。

それでは、S-S Raising を伴いうる *seem*, *certain*, *happen*, *likely* などの述語は、どのような性質のものなのであろうか。実は、これらの述語に共通する特徴は、単に文主語をとりうるというだけではなく、いわゆる非叙実的 (*non-factive*) 述語なのである。事実、叙実的 (*factive*) 述語の場合、S-S Raising を伴うことはない。

(7) a. *Harry is likely to accomplish more.*

b. **Harry is relevant to accomplish more.*

(8) a. *Dick is certain to choose it.*

b. **Dick is significant to choose it.*

しかし、非叙実的述語のすべてが、S-S Raising を伴いうるというわけでもない。

(9) a. *It is possible that she will pass the exam.*

b. **She is possible to pass the exam.*

(10) a. *It is probable that your team will win the game.*

b. **Your team is probable to win the game.*

possible や probable は、非叙実的述語であるが、S-S Raising を許さない。つまり、非叙実的であることは、S-S Raising を伴いうる述語の十分条件とは言えないが、必要条件にはなっていると言える。

上に述べてきたような S-S Raising は、ポルトガル語においても観察される。

(11) João parece estar doente.

John seem+IdPs+3sg be+If(/IfF+3sg) sick

<ジョアンは病氣のように見える>

(12) A moça é evidente ter

the girl be+IdPs+3sg evident have+If(/IfF+3sg)

gostado da dança folclórica.

be-fond+Pp+sg of-the dance folkloric

<その女の子がフォークダンスを好んだことは明らかである>

(13) Rosa é raro sair da casa.

Rose be+IdPs+3sg rare go-out+If(/IfF+3sg) of-the house

<ローザはあまり家から出ない>

(11) - (13) は、統語論上、英語の S-S Raising を伴う構文と特に異なると考えられるところはない。しかし、ポルトガル語には、これだけでなく、定形の埋め込み文の主語が、母型文の主語の位置に繰り上がっている構文も存在する。

(14) A professora parece que tem um

the teacher seem+IdPs+3sg that have+IdPs+3sg a

noivo.

fiancé

<先生は婚約者がいるようだ>

これに相当するような英語の構文は存在しない。さらに、次のようなポルトガル語の例では、明らかに、繰り上がっている主語に対し、母型文の動詞ではなく、埋め込み文の動詞が人称・数の一致をしている。

(15) As paredes parecia estremecerem.

the walls seem+IdPI+3sg shake+IfF+3pl

<壁がゆれているようだった>

(16) Os pardais parece que andam nas

the sparrows seem+IdPs+3sg that walk+IdPs+3pl on-the

pontinhas dos pés, como as bailarinas.

points of-the feet as the ballerinas

<すずめが、バレリーナのように、つま先で歩いているようだ>

(15) では、非定形の埋め込み文から繰り上がっている主語 as paredes に対し、母型文

の動詞parecia は人称・数の一致をしておらず、埋め込み文の動詞 estremecerem が人称・数の一致を続けている⁽²⁾。また、(16)では、定形の埋め込み文から繰り上がっている主語 os pardais に対し、母型文の動詞 parece は人称・数の一致をすることなく、埋め込み文の動詞 andamが人称・数の一致を続けている。

(15)(16)では、繰り上がった主語が埋め込み文の動詞との一致を保っているため、一見、話題化 (Topicalization) によって、theme (あるいは、topic) である埋め込み文の主語が文頭へ移されているようでもある。しかし、その文頭の主語と、その後の残りの文との間には、休止(pause)が置かれるとは限らないので、話題化とはみなし難い⁽³⁾。もっとも、母型文の主語の位置にありながら、母型文の動詞に、人称・数の一致を引き起こしていないので、埋め込み文の主語から完全には繰り上がっていないということは言える。

このように、ポルトガル語の S→S Raisingにおいては、上昇している主語と母型文の動詞との間に、人称・数の一致が起こるとは限らない。人称・数に関する、母型文及び埋め込み文の動詞と上昇している主語との一致には、埋め込み文が定形節の場合と非定形節の場合に分けて、それぞれに4通りの可能性がある。

- (17) a. *Os meninos parecem que estão com
the boys seem+IdPs+3pl that be+IdPs+3pl with
sono.
sleepiness

b. *Os meninos parecem que está com sono.
be+IdPs+3sg

c. Os meninos parece que estão com sono.
seem+IdPs+3sg

d. *Os meninos parece que está com sono.

<少年たちは眠いようである>

- (18) a. *As estrelas pareciam sorrirem.
the stars seem+IdPI+3pl smile+IfF+3pl
b. As estrelas pareciam sorrir.
smile+If
c. As estrelas parecia sorrirem.
seem+IdPI+3sg

d. *As estrelas parecia sorrir.

<星は微笑んでいるようだった>⁽⁴⁾

(17)は定形の埋め込み文からの、そして、(18)は定形の埋め込み文からの S→S Raisingであり、各文の適格性を表にまとめると次のようになる (V1=母型文の動詞, V2=埋め込

み文の動詞, +CONC = 上昇している主語との人称・数の一致がある, -CONC = 上昇している主語との人称・数の一致がない, ○ = 適格, * = 不適格)。

(19) a) 埋め込み文が定形節の場合

V1	V2	
+CONC	+CONC	(*)
+CONC	-CONC	*
-CONC	+CONC	○
-CONC	-CONC	*

b) 埋め込み文が非定形節の場合

V1	V2	
+CONC	+CONC	(*)
+CONC	-CONC	○
-CONC	+CONC	○
-CONC	-CONC	*

(19a, b) の表中、*に()を付したのは、繰り上がっている主語と、埋め込み文の動詞がある程度離れているような場合などで、母型文の動詞と埋め込み文の動詞の両方が、繰り上がっている主語と人称・数の一致をする例も見られるからである。

(20) Abelhas e marimbondos, de muitas qualidades e
 bees and wasps of many qualities and
 cores ... pareciam que estavam morridos.
 colors seem+IdPI+3pl that be+IdPI+3pl die+Pp+pl
 (Guimarães Rosa, *Corpo de Baile*)

<多くの特質と色を持つミツバチとスズメバチは、死んでいるように見えた>

(21) As aves aquáticas ... pareciam, nos seus
 the birds aquatic seem+IdPI+3pl in-the their
 vôos incertos ora vagarosos, ora rápidos folgarem
 flying unsteady now slow now rapid loosen+IfF+3pl
 com os primeiros dias da estação dos amores.
 with the early days of-the season of-the loves
 (Alexandre Hercurano, *Eurico, o Presbítero*)

<水鳥たちは、愛の季節の最初の日々とともに、ゆっくりとしたり、速かったりする不規則な飛行で、のんびりしているように見えた>

(20) の埋め込み文は定形節、(21) の埋め込み文は非定形節で、いずれも、母型文の動詞と埋め込み文の動詞がともに繰り上がっている主語と人称・数の一致をしている。しかし、実際、どちらの例においても、繰り上がっている主語と埋め込み文の動詞は、副詞相当の挿入句の存在によってかなり距離があると言える。

(19a, b) にも示したように、繰り上がっている主語との人称・数の一致は、埋め込み文が定形節の場合には、母型文の動詞とではなく、必ず埋め込み文の動詞となされるのに対し、埋め込み文が非定形節の場合には、母型文か埋め込み文か、いずれか一方における動詞となされればよいのである。こうした違いは、何によって生じているのだろうか。

これには、主節に対する従属度が、定形節と非定形節で異なるということが関係してい

と考えられる。非定形従属節（埋め込み文）は、その節自身が時制を持たないので、従属定形節よりも、時間に関する主節（母型文）への依存度が高く、この点から主節に対する独立性は弱く、従属度が高いと言える。主節への従属度が高いということは、非定形従属節が、主節と一体的で、融合性を持つということでもある。これに対し、定形従属節は、非定形従属節よりも、主節に対する独立性があり、その節自身で完結性を持つため、定形従属節の要素が、その節の境界を越えるような位置に現れることは難しいと考えられる。つまり、非定形従属節の要素と比べ、定形従属節の要素は、そもそも、節の外には現れにくく、その主語が、仮に、S-S Raising によって主節の主語の位置に現れる場合でも、母型文の動詞ではなく、従属節の動詞に人称・数の一致を引き起こし、従属節の主語という地位を明らかな形で示していると解釈される。

3. 主語から目的語への繰り上げを伴う構文

3.1. 「思考を表す動詞 + Nexus-object」

S-O Raising を伴っている英語の構文として、まず挙げられる例は、次のようなものである。

(22) John believes Bill to be a criminal.

(23) I expect them to remain silent.

(24) The evidence proved him to be innocent.

(25) Jane suspected him to hold a different opinion.

(22) - (25) に用いられた主節の動詞 believe, expect, prove, suspect などは、目的語として名詞句 + to 不定詞（節）だけでなく、that 節もとることができ、両者はパラフレーズの関係にある。

(22') John believes that Bill is a criminal.

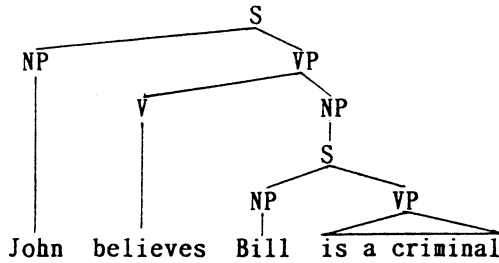
(23') I expect that they remain silent.

(24') The evidence proved that he was innocent.

(25') Jane suspected that he held a different opinion.

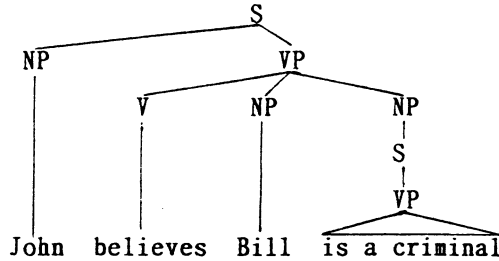
(22) - (25) が、それぞれ、(22') - (25') のように言い換えられることから、believe 等の動詞は、ある個体自体ではなく、命題を目的語としていることが明らかである。(22) であれば、「ビル」という個人そのものを信じるというより、むしろ「ビルが犯人であるということ」を信じているのである。(23) - (25) についても同様である。「彼ら」を期待する、「彼」を証明した、「彼」を推測したというのではなく、「彼らが静かなままであるということ」を期待する、「彼が無実であるということ」を証明した、「彼が異なる意見を持っているということ」を推測した、と解釈される。従って、(22) ならば、おおよそ (26) のような構造を基底に持つと考えられる。

(26)



(26) に対し、表層の (22) の構造は、次のように示される。

(27)



(27) は、(26) から、従属文の主語 (Bill) が主文の直接目的語の位置に繰り上がった構造となっている。

(22)–(25)のような S→O Raisingを伴う構文は、ポルトガル語にも存在するであろうか。まず、believe 等に相当するポルトガル語の思考・認識を表す動詞が、名詞句+不定詞 (節) を目的語にとることはない。

(28) *Creio João ser inteligente.

believe+IdPs+1sg John be+IfF+3sg intelligent

<私は、ジョアンは頭がよいと思う> ⁽⁵⁾

ポルトガル語の場合、思考動詞だけでなく、英語の want, wish, hate などに相当する情緒を表す動詞も、名詞句+不定詞 (節) を目的語にとることはない ⁽⁶⁾。

(29) *Helena quer seu esposo trabalhar muito

Helen want-IdPs+3sg her husband work+IfF+3sg much
mais.

harder

<エレナは夫がもっと働くことを望んでいる>

しかし、ポルトガル語に S→O Raisingを伴う構文が存在しないわけではない。

(30) Considero Jorge honesto.

consider+IdPs+1sg George honest

<私は、ジョルジェは正直だと思う>

(31) Julgo-me feliz.

judge-myself+IdPs+1sg happy

<私は自分が幸福だと思う>

(30) では Jorge が、(31) では me (再帰代名詞) が、埋め込み文の主語から母型文の目的語の位置に繰り上がっていると考えられる。ここで注目される点は、埋め込み文につなぎ動詞(copulative verb) が現れないということである。

(30') *Considero Jorge ser honesto.
be+Iff+3sg

(31') *Julgo-me ser feliz.

つまり、considerar, julgar などの目的語節は、S-0 Raising を伴う場合、必ず、つなぎ動詞のない名詞述語文か形容詞述語文なのである。英語においても、S-0 Raising を伴う目的語節が、つなぎ動詞のない名詞述語文、形容詞述語文の場合がある。

(32) a. I found him to be a genius at mathematics.

b. I found him a genius at mathematics.

(33) a. He remembered Jane to be inquisitive.

b. He remembered Jane inquisitive.

(32a)と(32b)、(33a)と(33b)は、ほぼ同意だが、to be のある方が、普通、客観的、間接的な判断を表すことになる。

3.2. 「知覚・使役動詞+ Nexus-object」

英語で S-0 Raisingを伴う構文としてよく知られているものは、前節で述べた believe 類を主動詞とする場合である。しかし、それだけではなく、次のような知覚・使役動詞を主動詞とする構文にも、S-0 Raising が関わっていると考えられる。

(34) I saw the plane land.

(35) You made me change my mind.

(34) で、私が見たのは、「飛行機」という個体だけではなく、「飛行機が着陸すること(事態)」であり、また、(35)においても、あなたは、「私が私の考えを変えるということ」をさせた、と解釈される。つまり、(34)の the plane、(35)の me といった要素は、埋め込み文の主語と母型文の目的語という二重の機能を担っていると考えられるのである。

このような S-0 Raisingを伴う知覚・使役構文は、ポルトガル語においても見られる。

(36) Eu ouvi os meninos cantarem.

I hear+IdPP+lsg the boys sing+Iff+3pl

<私は少年たちが歌うのを聞いた>

(37) Paulo viu-as chorar.

Paul see-them+IdPP+3sg cry+If

<パウロは彼女たちが泣くを見た>

(38) Mande-i-os esperar no escritório.

command-them+IdPP+lsg wait+If in-the office

<私は彼らを事務所で待たせた>

(39) Ela nos fez estudar.
she us make+IdPP+3sg study+If

<彼女は私たちに勉強させた>

ここで、(36)における埋め込み文の動詞が人称不定詞であるという点には注意を要する。仮に、(37)–(39)における埋め込み文の非人称不定詞を人称不定詞に代えると、適格な文ではなくなる。

(37') ?Paulo viu-as chorarem.
cry+IfF+3pl

(38') ?Mandei-os esperarem no escritório.
wait+IfF+3pl

(39') *Ela nos fez estudarem.
study+IfF+3pl

つまり、規範的な文法の枠組みでは、知覚・使役動詞の目的語として埋め込まれている文の主語が、直接目的格代名詞となっている場合、その埋め込み文に人称不定詞は用いられないのである。

さらに、ポルトガル語には、(36)–(39)のような構文だけではなく、定形の埋め込み文の主語が、主節の目的語の位置に繰り上がっている構文も存在する。

(40) Ouça esta sonata como é triste.
listen+SbPs+3sg this sonata how be+IdPs sad

<どれほどこのソナタが悲しいか聞きなさい>

英語には、これに相当するような構文は見られない。

4. 結論にかえて

S→S Raising に関わる要素は、主語の機能を持つ従属節での主語であり、かつ、主節で主語の機能も帯びている。他方、S→O Raising に関わる要素は、目的語の機能を持つ従属節での主語であり、かつ、主節で目的語の機能も帯びている。一般化するなら、繰り上げに関わる要素（名詞句）は、従属節そのものの文法機能を、主節においても引き継ぐものであると言える。こうした繰り上げは、英語だけではなく、ポルトガル語にも観察される。ただし、定形の従属節の要素が、主節の要素として繰り上がっている構文が存在するかどう点という点で、両言語は大きく異なる。ポルトガル語には、こうした構文が、S→S Raising, S→O Raising のどちらの場合においても観察されるのである。つまり、両言語における定形従属節は、普通、節の最初の位置にその従属的地位を示す標識を持つが、ポルトガル語の場合、そうした標識を越えて、従属節の要素が移動するという点である。このことには、ポルトガル語が、英語より屈折的な言語であり、語順に比較的自由な面が

あることも関連しているのではないかと考えられる。

【注】

- (1) 文末に節が移されている現象は、外置(Extraposition)というイエスペルセンに依る用語で知られている。
- (2) ポルトガル語には、主語の人称・数に従って変化する人称不定詞(infinitivo pessoal)が存在するため、時制を有する節を定形節、時制を持たない節を非定形節とみなすことにする。
- (3) (15)(16)を、Head Start (主要部飛び出し)、あるいは、NP-Detachment (名詞句分離)を伴っている構文と分析する立場もある。
- (4) (18b)と(18c)では、前者の方が口語的である。
- (5) ただし、Creio ser João inteligente. は認められる。つまり、主節の主語とは異なる従属非定形節の主語が明示される場合、常に不定詞の後に置かれるのである。
- (6) want 類の補文は、いわゆる同一名詞句削除(Equi-NP Deletion)によって派生されており、believe 類のとり Nexus-object とは性質が異なるという議論もある。しかしながら、形式上、両者は明らかに類似しており、しかも、例えば、Everybody wants to win. が、Everybody wants everybody to win. のような文から派生されているとは考えられない点(つまり、前者では、wanter=winnerであるのに対し、後者では、wanter≠winnerである)などから、believe 類と want 類の違いは、文法的にそれほど明確ではないと言える。

【略号】

IdPs	直説法現在	1	1人称	S	文
IdPI	直説法未完了過去	3	3人称	NP	名詞句
IdPP	直説法完了過去	sg	単数	VP	動詞句
SbPs	接続法現在	pl	複数	V	動詞
If	不定詞(非人称)				
IfF	人称不定詞				
Pp	過去分詞				

【参考文献】

- Blake, Barry J. (1990): *Relational Grammar*, Routledge, London.
- Borba, Francisco da Silva. (1981): "A Regra de Alçamento em Português", in *Estudos de Filologia e Linguística*, T. A. Queiroz, São Paulo, pp.169-179.
- 奥野忠徳. (1989): 『変形文法による英語の分析』現代の英語学シリーズ<第9巻>. 開拓社. 東京.